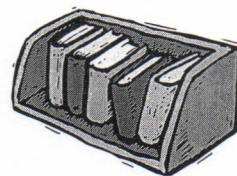


るかについて、学会発表や論文投稿を行った。日ごろ、社会的弱者に対して健康的なフォローを行ってれば、病態が悪くならずすんだのではないかとの問題提起も行った。私が勤務していた病院では、今も公園で社会的弱者に対する健診などの取り組みを行っているが、官民一体となった取り組みが大切ではないだろうか。

話をもとに戻す。DPC の取り組みにおける最大のメリットは、何といても他医療機関とのデータ比較であろう。それによって大学、医療機関、企業など、さまざまなグループにおける研究会活動の結果、臨床指標の構築、クリニカルパスへの応用など医療の質向上へとつながると考えられる。

では、具体的に DPC データをどのように利用したかを次回に述べる。

(おがた・のぶあき 福岡市在住)



## 『子宮頸がんワクチン、副反応と闘う少女とその母親たち』

黒川祥子・著 集英社 2015年6月26日発行

四六判 320ページ 1,600円(税別) ISBN-978-4-08-781568-9

本書の概要は、帯封裏に次のように記載されている。

少女たちを守れない社会に、未来などない。日本で 338 万人が打ち、未だ打ち続けている「子宮頸がんワクチン」。それを接種した結果、少女たちに何が起こったのか。第 11 回開高健ノンフィクション賞受賞作家が、今まで誰も踏み込まなかった 6 人の少女たちの日常を取材。想像もできないような、さまざまな症状に脅かされながら、健気に闘い続ける娘と、その母の姿を追った。さらに産婦人科医師、治療する医師、厚生労働省などの証言も加え、「子宮頸がんワクチン」問題を多角的に検証。これは決して「対岸の火事」ではない。

また、帯封の表には、「すべての母親が読むべき一冊！ 少女たちの涙に胸が裂ける。激痛、記憶障害、眼振、痙攣…「子宮頸がんワクチン」後遺症の全貌がここにある。(石田衣良氏・作家)。

著者の黒川祥子(くろかわ・しょうこ)氏は、1959 年生まれ。福島県出身。東京女子大学文理学部史学科卒業。弁護士秘書…業界紙記者などを経て、フリーライターに。家族の問題を中心に執筆活動を行う。(以下、著書など割愛)。

本書は、「子宮頸がんワクチン」(以下「HPV ワクチン」)接種後に、石田氏が「激痛、記憶障害、眼振、痙攣」と書いたような諸症状を起こした 6 人の少女とその母親たちへの取材記事を中心に、各章の合間に、被害者団体支援者、研究者、専門医、産婦人科医師へのインタビ